

日本書紀傳

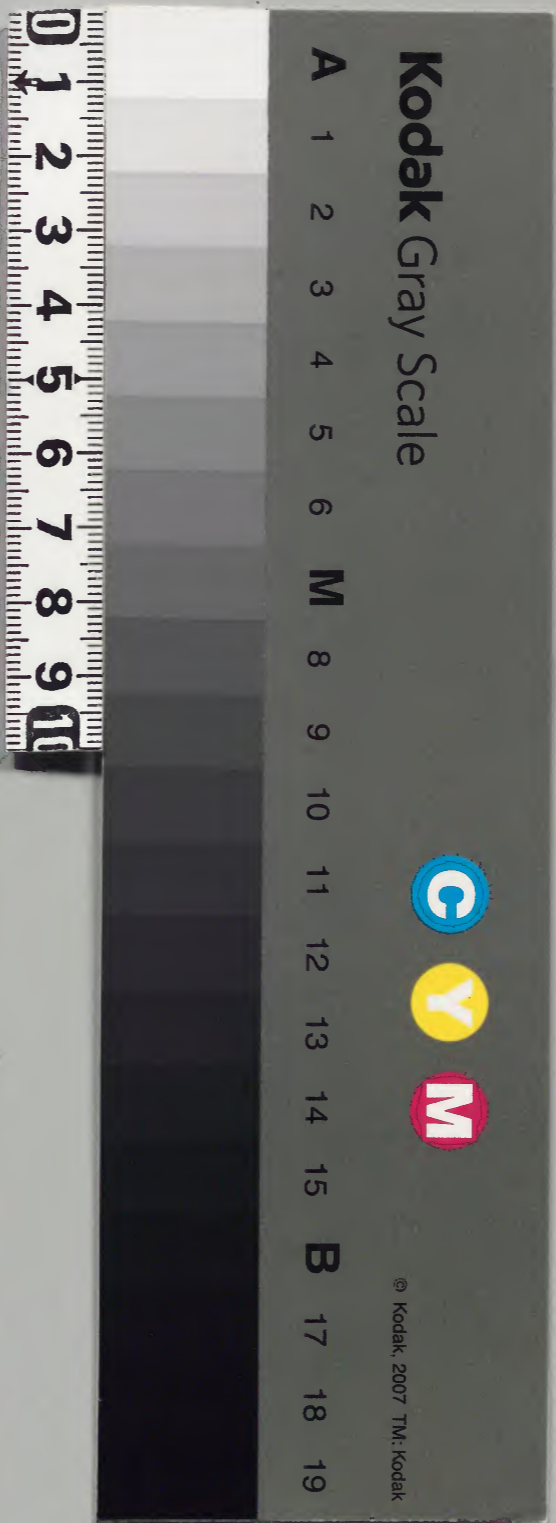
十卷五

初書
一〇五二號

二二二

内二二六八三號

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (31)		
函號	特	85	1



教部省
文庫印

圖書寮
文庫印

青政官
文庫印

伊特諾尊既還乃追悔之曰

吾前到於不須也凶目汚穢

之處故當滌去吾身之濁穢

則往至筑紫日向小戸橋之

檉原而被除焉遂將盪滌身

内一六八三號

○日本書紀傳十

○二百七十三

因以生神號曰表津少童命
 次表筒男命凡有九神矣其
 底筒男命中筒男命表筒男
 命是即住吉大神矣底津少
 童命中津少童命表津少童

命是阿曇連等所祭神矣

既還云々ハ上小己到泉津平坂と見えたり其処迄女
 神の追及給ひければ千人所引磐石以て其坂路ふる
 泉門を塞て絶妻之誓を建て巖^頭同て泉田との境界を
 給ひて互小相往来を通路を断給ひければ小女神の日
 毎小千頭^嶺致むと申給へる昔ハ当小千五百産屋立
 てひと告勝給ひ其泉門ハ八衢比古八衢比賣神を
 て令衛め又岐神を小相副て岐三柱を塞神と定給ひ
 て残る所無く神政^畢給ひければ彼^国小街一給ひければ

御装束共の中ニ黒御鬘ハ己ハ彼國にて擲給へり是
古事記ハ御冠あり次ハ左右の御櫛ハ一序之
火ハ燭ハ又泉津醜女ハ投給へれバ御頭髻の物ハ
大御身ハ着てハ非ハけハるハをハ猶御帶有ハ御衣有ハ
御禱有ハ以テ亦彼汚行穢ハ醜ハ國ハの濁穢ハ觸ハりハ御在
一物ハあり故ハ引引給テ直ハ投棄ハ給ハ入ハけハるハ時
置師神煩神ハ罔ハ罔ハ神ハと成出たり是病神なり次ハ奥
疎ハ疎ハ神ハ奥津那藝ハ佐ハ昆ハ古ハ辺津那藝ハ佐ハ昆ハ古ハ神ハ奥津甲
斐ハ辨ハ羅ハ辺津甲斐ハ辨ハ羅ハ神ハと又迷ハし生出ハつ其邪神ハ
り大御身ハ着ハせハ御在ハ坐ハ一物ハあり有ハれハと泉國

穢惡あり原ハ際入ハて有ハ一ハ其泉門ハにて擲返ハ給
ひけむ故ハ其神ハの彼國に属ハく可ハき理ハありハ頭ハ國
あり其魂ハの遺ハつて有ハ一ハ改ハ其黄泉ハに在ハる正身ハの右
の塞神等ハの潔ハか令給ハひ野田ハの遺ハれハる魂ハの入ハ託託て
疾病ハを成ハ一物ハ馮馮て夫邪邪邪を成ハす其本國の縁ハて塞
神ハの又守奉ハる事ハと泉門ハにて出返ハり也御在ハ坐ハる後
の御政ハ万ハ口惜ハうハず行定ハり物ハ為ハさハ御在ハ坐ハる
畢給へり所ハあり故ハ既ハ云ハとハ有ハありハ古事記
の諸ハの一書ハ共ハの傳ハハを取合ハせ又予ハが始ハて見ハる所ハ有
て其見識ハは任ハか上ハ心説ハたり一事を言ハふハ如ハ其ハ
云ハ續ハけた故ハ以ハ既還ハと有ハ一伊弉諾大神ハの本宮ハに還
る看ハあり

くせ御在し坐るを云ふる備伊弉諾伊弉册二神の同
宮共住之八咫起元章の所見たる宮ハ殿取盧嶋あり
被八尋殿あり然れども雖も其ハ妹妹二柱嫁絶給ひ
料不建給へり一宮ハ有れバ女神の下津用ハ往坐
一書ハ此と同ト件ふる所ハ往見粟門及速吸名門と
有る御道次を以考奉るハ決之其ハ八尋殿ありむ有り
多但瑠珠盟約章ハ構幽宮於路之測と有れども其
登天報命ハ給ふハ就ハ頭用ハ御魂を留さし給へり
宮を攝り給へり云ふハ此ハ一書ハ後ノ事あり又

古事記ハ其伊弉那岐大神者坐落海之多賀也と有ハ
須佐之男命を神速給ハハ相住セ給ハハ相宮あり
其ハ此ハ一書ハ後ノ事あり右ノ八尋殿ハ見たり云
実ハ此ハ一書ハ後ノ事あり所思たり云ハ又其ハ一書ハ
身條ハ思ハ直り云ハ一書ハ後ノ事あり○追悔ハ後悔之云
ハ崩シ以前ハ物為たり一書を其本ハ後ノ事あり
過古ハ物ハ後ハ一書ハ追及を追附と云ハハの追あり悔
ハ崩シ以前ハ物為たり一書を其本ハ後ノ事あり
く成て嘆ハ意あり万葉三十四ハ後ハ後悔將有ハ亦

〇日本書紀傳十

〇二百七十七

八十二丁の意を事者
後悔在

△十二丁の悔毛老尔
未鴨

四三丁の後悔尔虽云驗將在八方と云ふ和へて相而後
社悔ニ破有跡五丁云ふと有る皆後悔の追悔
の例あり但久由の自悔を事あるを久夜斯と云ふ他
の例あり但久由の自悔を事あるを久夜斯と云ふ他
地尔悔事乃世間乃悔言者七丁云ふ悔毛満奴流嗚鹿
十一丁の悔時亦相在君鴨十一丁云ふ悔我裏紐結手後
十四丁の勢奈那登布多理左宿而久也思母十五丁
の久夜之久妹字和可礼伎尔家利ふと有り久由と久
夜斯と思恨ふ可うと云ふ
有勳其字美の物に倦勞あり又久夜字と云ふ活けと云ふ古言の
後悔ありと為るふと又久夜字と云ふ活けと云ふ古言の

見当 ○前、程を過して後、立渡りて来一方を云
あり茅十一書、始為族云と有り始亦同十神武天
皇御紀の天皇往嘗嚴覓粮と有り往字を、佐伎と
訓あり然れ、天孫降臨章の是矢則昔我賜天稚彦之矢
也と有る音を伊武佐伎と訓あり、往前と云事あり可
一、迹を武と云例、漢字三音考の此なる多迹波
を丹波那迹波を難波と云音便の是なり名実
抄の音の伊迹斯同と云訓あり有れ、古言の伊迹佐伎
と云一、事灼知、備右の始字、佐伎と訓べきあり、万
葉一、小端麻形乃林始乃狭野榛結と有、松方の林崎
と云事あり、小始字を用ひたるを思ふ可、後や波自
米の、有れ、其の右の如く昔前云と云、其の在を以見
る、小程短て後、おが御被除の事、思ひ、立給ひけし

し上の云々如く御心の残り所無く返り御在り坐し
りども猶彼国小行觸給へり汚穢の御身小着て有
しつバ御心の清くしつらりし故小御被除の事を
所思し立せりしを以て前々有るり○到於不須也
凶目汚穢之處ハ前小黄泉小吾不意到於不須也凶
目汚穢之同矣又宣へる小同く具事を重ねて詔ひ
出させ給へるふり古事記ハ是以伊邪那岐大神詔
吾者到於伊那志許米志許米岐穢国而在邪理之所見
たつ但歎ふるハ第七一書小不須也凶目汚穢此云伊
碓之居梅根多碓根と有て凶目小之居梅根と註せ

す根ハ衍ふれば伊碓之居梅根多碓根と訓べし強て
古事記の如く訓べりざる事己百六十ハ註せり不
如ハ天孫降臨章第一一書凶目杵之同と有る醜不
可有状を指し詔ふれば其ハ之居梅根と訓つ
可きと歎め凶目の醜ふる目小達給へる別あり
但正しく古事記の如く志許米岐と有る欲
き所ふれど古事記ハ之居梅根小當
れら字並れば然ハ訓難者あり第十一書小親見泉
田既既不祥と有る如く然る醜めき田小到坐し御事
を追て悔ふは給ふ所ふる故小前小黄泉小宣へり
御言を其任の宣へるふり中宮小還り御在り坐し後
の親しく其国小往見給ひし事の御心小清也給ふ
せらりしが故小大く歎つて給へるふり
古事記無神
宮段小故至

△あり又皇御孫
會と申奉れり
も皇御身尊と
申す事少て世中
を統御し坐す
御體にて渡りて
給へり由ありを
も合せ考ふ可
き者
一第十一書
る穢惡の訓と然
あり

三年任其固於是火遠理守惡具初事大^一歎見之
不^レ合して其追て悔給へり時の御歎想像奉り可^レ
い○吾身之ハ古事記ハ故吾者若御身之袂也有^レ小依
て吾者御身之^ハ訓ハ^ハ記傳六^ハ十^ハ小御身ハ意富美
麻と訓ハ^ハ貞觀儀式奏御體御ハ條ハ奏云宮内省申
久御體^{詞云於}御ハ供奉禮留事申給年止神祇官姓名
候止申と有^レ小依れり四時祭式宮内省式ハ見御身
ハ古言ハ年々多^ク云れハ麻と云ハ^ハハ^ハ有
小後へる^ハ若^テ其ハ大御身ハ美^ハハ^ハ所由傳ハ九^ハ十
二^ハ丁^ハ小^ハ毒^ハ○濁穢ハ^ハ禰賀良波志^ハ伎母能^ハ訓^ハ任^ハ小
て有^レ一^ハ宝^ハ劍出現章第三^ハ一^ハ書ハ^ハ汝是躬行濁惡而^ハ

△万葉十^ハ不^ハ穢
及^ハ久^ハ編^ハハ^ハ其
詠

と有^レ濁惡を心然訓り諸禰賀礼と云ハ^ハ清^ハ淨^ハの及^ハ小
て其事を直^ハ云^ハハ^ハを禰賀良波志と云^ハ時^ハハ^ハ其^ハ清^ハ淨
り^ハぬ^ハ形状^ハを^ハ指^ハて^ハ宣^ハへ^ハり^ハ故^ハ考^ハり^ハ小^ハ前^ハハ^ハ不^ハ須^ハ也
凶目汚穢之處ハ到^テ在^レり^ハと詔給へる^ハハ^ハ大^ハ御
何れ^ハ其^ハ指^テ云^ハハ^ハ物^ハハ^ハ無^ハれ^ハハ^ハ何^ハと^ハ無^ハく^ハ御^ハ心^ハ巨
り^ハナ^ハ所^ハ思^ハせ^ハり^ハ故^ハ小^ハ禰^ハ賀^ハ良^ハ波^ハ志^ハ伎^ハ母^ハ能^ハと^ハ唯^ハ大^ハ抵
小^ハ宣^ハ給^ハへ^ハり^ハ但^ハ古^ハ事^ハ記^ハ小^ハ穢^ハ繁^ハ固^ハと^ハ有^ハを^ハ延^ハ佳^ハ本^ハ小
記^ハ傳^ハハ^ハ伎^ハ多^ハ那^ハ伎^ハ志^ハ伎^ハ具^ハ迹^ハと^ハ訓^ハハ^ハ誤^ハあり^ハ
其^ハ鏡^ハハ^ハ後^ハハ^ハ可^ハ一^ハ其^ハハ^ハ双^ハり^ハ例^ハハ^ハ立^ハず^ハ諸^ハ伎^ハ典^ハ伎^ハを^ハ本
か^ハし^ハ其^ハ反^ハ小^ハ伎^ハ多^ハ那^ハ伎^ハと^ハも^ハ禰^ハ賀^ハ礼^ハハ^ハ云^ハハ^ハ共^ハ小^ハ天
中^ハの^ハ氣^ハを^ハ本^ハか^ハし^ハて^ハ云^ハ出^ハた^ハる^ハ詔^ハハ^ハ伎^ハ典^ハ伎^ハハ^ハ氣^ハ具^ハ來^ハ

伎多那ハ氣豆無多事止百六十小註多ケ如ク祁賀
礼ル亦其例ハテ氣離云事礼又伎多那志々祁賀
並ぶハ都多那志と都加流との如ク其礼都の津液不
多ヤホカシテ云詰ハテ拙ハ津足無多リ旁ハ津膏不
リ具津と云物ハ一傳四ハ津速産靈神の傳又其卷
八十三下カハ云不如人ハ離云物ハ一具ハ氣と
相共ハ身中不氣ハ人の呼吸呼吸して活多所以者多リ
活ハ氣有死ハ氣離云不ハ一身を保ツハ其氣ハ依れ
多故ハ人の生多クや氣の具具不ハ人の死多クや氣の
離多ク生を清浄汚死を汚穢と為多事ハ亦其ハ
因れる者多リ借物事の正正直多ハ天地の氣ハ逆
スハズ一テ其神隨行行行多クを不須世ハ目魄

め多事ハ一ハ水の濁れるケ如ク物の朽た多ケ如ク
一テ其氣ハ濁リ朽正有ハ其養ハ成ヤ多天
地の正正直直神隨正氣ハ其為ハ腐多事ハ故ハ
神ハ忌給ハ人ハ嫌多事ハ故ハ其ハ然ル言攀
ハ有ハ者多リ然レハ其言ハ一ハ元天地の氣ハ本
九十一丁又其卷の六丁ハ〇滌滌ハ旧ハ依テ阿良
云る氣の説を引テ心得得ハ〇滌滌ハ旧ハ依テ阿良
比須氏牟登能理多麻比氏ハ訓ハ一阿良布ハ其所汚
を濯濯多ハ新新成合成多を云多リ古事記海宮段ハ
取出而清池奉火遠理命万葉十一ハ丁ハ上尔洗若
菜之十二菜十九菜院不取替阿之十三院三丁ハ蛾葉之衣浴

△十八小據之衣解洗
又

△其ハ筑紫國檀
日向ノ事
小殊更ハ日向國
指宣ハ

日向國國にて了物為給ひけり今ハ筑前國ふと位幸行
る小ハ非多可く又其鹽筒光翁ハ住吉大神ふる在
橋之小戸之教奉れるハ卒ウチマケ亦ある状ハて餘離り也
た多程と見えざるを神功皇后所紀ハ各神等ハ伊
勢國淡郡ふと國郡を御名來坐一中小住吉大神ハ
於日向國橋小門之水底所底而水葉稚之出居神と告
給へるを以て日向國今云ある可く所思多あり後名
始不及りて記さ給へりとし云ハバ後名けれど
も景行天皇十七年仰紀ハ幸子陽縣遊丹裳小野時
東東望之謂左右曰是國也直向於日出方故号其國曰日
向也と有てこ日向名と定れハ其を取て神の諭
奉れり也為ハ後日向風土記児湯郡ハ所ハ橋原
少クも障り無

郷是即伊弉諾等拂清汚濁給住吉神所出之所也云々
又橋小戸郷是則伊弉諾等拂清汚濁之地也と有り
橋原と橋小戸とを別小為りハ小筑紫日向小戸橋
之橋原と見え茅十一書ハ橋之小門と云ハ古事記ハ
筑紫日向之橋小門之阿波岐原と言統けたりハ合ハ
されど此此ハ小門橋と御身跡の所と一橋原ハ天神
を祭りて彼の業を為給へり所と見え時ハ以將叶
ハガフハハ非ズ文文ハ橋原ハ拂清と云ハ橋小戸
ハ拂清と有れハ板と楔との差別とハまて寔寔小謠
ハハ有り又彼國ハ高千穂岑ハ初國所知食一皇御

事と為るハ非あり以事傳西卷なり古事記高千穂宮殿
高皇產靈并神皇產靈符の下の云り
小朝日之直刺国夕日之日照国也故其地甚吉地詔而
と見え朝倉宮殿歌の麻岐年久能比志古能美夜波
阿佐比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜と詠之
皇太神宮儀式帳の太宮処の事を朝日来日向国夕日
未向国と稱申す事見え山城国向日神社記の朝日
之直刺地夕日之日照地天離高向津日山吾覓地吾欲地
也又宣へる神の御言見え小倉神社傳記の朝日刺
隠知夕日日隠処と見ゆ但隱を許母流と訓之指入
方美あり可一太夜訓の皇御孫之命行故云く大倭日

倭日高見之田平安国止定奉氏下津磐根尔宮柱太敷
立と有ハ高千穂宮の地ふるを日高見国と云るあり
大倭の中洲小宮敷坐て後小加へたる事あり其小
皇大宮の四方を見霜りして天日を長く見り地亦定
る例あり小依て高千穂宮の古文の任引被用るあり
大門类聚方の日向葉高千穂葉大伴宿禰家守傳之奏
焉と見え其次向日高見葉日向国崎氣早乃方と有
ルハ高千穂宮の日高見之田亦在しと知べく又古事
記の朝日之直刺国夕日之日照国と有し日光を長く
見奉る由あり多し合せ曉る可き者あり万葉十一小
高山亦高都左渡高尔余待公乎待將出可南十二
小十五日出之月乃高尔亦若乎座而何物乎加将念ふ
と所見たる高を長く心得る時ハ甚能聞ゆるを
思ふ備古小右の如く天日の直向ふ地を一吉地と
可一

賞祿ある事ハ一具天日ハ謂ゆる高天原ハ一ハ
百萬千萬神の本処トシテ神雷坐レハあり人の世中
ハ生出ラシ皇御孫等の如ク現御身身ハ天降坐ト
ハ異ふリト雖ハ大同類聚方ハ比奎乃美乃奈連流平
自免波安萬都美陀麻美豆保乃解乃不多通乎加波世
云ハト有テ安萬都美陀麻ハ一ハ謂ゆる高皇產靈神
皇產靈二神の產靈の所靈ハ此ハ形體を父母ハ受ト
雖ハ靈性を天神ハ得テ生ルルカ故ハ我ハ人ハ不知
トシ小天日計リ心の寄ル者ハ非ラ多ク家ハ居テハ
其具^其旋轉方を想ヒ出テハ直ハ其光を見奉ル心ハ成

ルト云ハ我人共ハ生メ始死メ終共ハ孫列ハダラ事
無カ故ハ計ラズル慕ハトシカ故ハ為ラ事アリ以事
傳六卷の首ハ伊弉諾尊伊弉册尊の天降坐事ハ就
テ粗云ラを具告ハ瑞珠盟約章登天報命リ下ハ云を
見テ知故思ハ小伊弉諾尊の向日向ハ処ハ往坐テ禊
祓ハ給ヘラハ皇ハ天日ハ向ハセ給ハレハ叶ハダラ
事の有テ物為給ヘラありけリハ洲起元章ハ陰神の
先言給ヘラを事既既不祥ト有テ第一ノ書ハ故還復還復
ト諸於天具奏其狀時天神以太呂而ト合之云ト有
テ天神の御命を請奉ルセ給ヘラハ以ハ小茅十ニ書ハ
親見泉國以既不祥ト有ハ先ハ陰神の先言ハ過

の不祥あり其陰陽二神の絶妻之誓を建給ふ計の
大なる不祥あり其多て天神の御命を請せ給ひ
ると云事や有べき其時天日向ふ処小往坐て
被除ふと為給へし云事を曉奉りしころ有
けのこ恐れれども推量し奉り者あり然る天日
いこ天照太神を天柱以て送奉奉り給ひて高天
原を令知奉り給ふ物なり元なり其成れる天地の
初時より天御中主等^{高皇產靈等}神皇產靈等の神積
坐れば其三柱の皇祖天神を祭り給ひ其靈威の頼
て彼除こり尽さる泉下の穢を根^國底^國の流^{カス}流^誰へ

失給はむと殊更天日向ふ処ふ出坐て行給ひ
けし但天日向ふと云へば東へ西へ向り也
給ふと聞えて指所定らざるが如くふれども景行天
皇御紀の直向於日出方故其日向日向と有る故実
小依て今の筑前國小然る地理あり海濱の魚し
い其小就て其日向國を探索い可くあり有ける
時ハ未日ハ無れども伊邪那岐神の詔し御言ふ
非れハ妨魚し其地後ハ避道日向ふ処あり故ハ如
ハ柄たるありと云れたる是下ハ僻事あり然る
古事記及一書共ハ神ハ其御身降の時ハ坐る
趣ハ傳へてハ有れども其ハ正書の傳を正しと為
る事傳ハ卷ハ註ハ云ハ更ハ又天照太神ハ所食
て御在し坐る事云ハ更ハ又天照太神ハ所食
るハ御在し坐れ天日向ふし坐されハ其時未日魚し

こハ云れざる事あり又天日小如以訓小向ハセ給ハ
地を撰びて給ふ事ハ右云々如き訣有て皇祖天神
の御璽を請給ふ事ハ此ハ大祓詞小高天原 尔神雷坐
然る輕くしり事ハ非ず
皇親神漏岐神漏夫乃命以云天津罪止云國津
罪止云許太久乃罪出武如以出波天津宮事以氏
大中臣天津金木本打切末打折氏千座置座カ置足
波志天津管曾平本折新末折切氏八針尔取碓氏天津
祝詞乃太祝詞事乎宣礼如以乃良波天津神波天磐
門乎押披氏天之八重雲乎伊頭乃千別尔千別氏所聞
食武國津神波高山之末短山之末尔上坐氏高山之伊
穗理短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武如以所聞食波

皇御孫之命乃朝廷乎始氏天下四方國尔罪止云布罪
波不在止云高天原尔耳振立間物止馬牽立氏云
之有る歟ハ素戔嗚尊天津罪を犯給へる故事ハ本
着た多者ハ其祓禊の始ハ一伊弉諾大神小坐れ
ハ萬ハ天大神の先蹤小擬ハ給へる事云ハ更ある
を如以高天原の事を主と云ハ天大神の日向ハ
所小於て其高天原小坐了皇祖天神の御方小向て祈
ふ也給へる小依て下小所見たる如き貴き神等ハ生
坐る者ありず一唯身を滌ぎ給へる耳小然る驗ハ
有る物ハ被泉門より還る也給いて後何れの地小

又敏達天皇十年
御紀小泊瀬中
流面三諸岳漱
水而云々有也

ひて水辺小降立坐て水を給給ふ計の事の出来坐
ざる可しやハ後世ひてハ被禊と云ハ神を祀りて一
處なる重き神事あるを以て廻りて神代小てハ甚ト
神事ありし事を想ふ可くあり有ける其ハ亦日ハ
ハハ給へりハ證ハ云るあり能く向以て物有
止ハ云る事共を思合ヒ考ふ可し如以て記し定めて
釋紀を見れば私記ハ以て一書ある是即住吉大神矣と
云事を又問今如以文者以三大神者多在筑紫橋之小
戸而今在攝津国墨江如何答以神荒御魂者猶在筑紫
但和魂獨在墨江耳案神功皇后記云々然則以神本在
筑前小戸即神功皇后初遷居於攝津墨江耳と有り已

速

今本計書小往見粟
門及連吸名門然以二
門湖既太急故遷向
於橋之小門と有也
一説筑前國多事
を明す文あり其ハ
太神の本宮に於路田
る其ハ一ハ行渡田
を渡田を經給ふ
多れハ若今の日向田
ふむ其ハ一ハ橋
行向也給へる事
如多を遷向と有
其ハ一ハ引込と給
へる其ハ其橋之小門
ハ徳院前田多事
疑魚子可き者なり

其

小私記の頃被御紀小日向国橋小門と有を筑前国と
心得居たり故筑紫橋之小戸と筑前小戸とハ
云りハカウ神名式小筑前国那珂郡住吉神社三座並名
神と有ハ私記小謂ゆ荒御魂是ハ以て以神本在筑前
小戸と有を以見り其和御魂ハ住吉大神ハ同処ハ
並御在りし事決ハ然ハ私記の頃迄ハ小戸と云る
地名の詳ハ小傳あり有けし事云ハ更ハ予安政
元年閏七月其國の宗像大神小詣た多序小彼住吉神
社ハ詣て其地形を考る小那珂郡神功皇后御紀ハ是元たハ碓同那珂川と云川
有り其を隔てハ西ハ福岡あり東ハ博多あり其ハ

其川止の方小行見多小具福因博多之地小入海ふり
川^{土砂の流れ入キ}を埋れて里と成れ多ふて^{其川止}數里の間同ト事ある
古小ハ大あ多湖の如くふりけむ故小其西面ふる山
際之地ふい朝日の日向ふ処小有けれハ其を心神の
御言小日向^國同トハ宣へりけむと思定多小至れり
ハ土人葉山春^蓑と云人の語多を聞くと青柳種信説
小那珂郡神村と云多ハ和名抄郷名小那珂と有る其
地あるガ其小現人大明神と云社有て住吉神を祀ル
り万葉六^{三十一}小住吉乃荒人神と録ると合ハ又近く
山田村小宇度山と云地有り檜原柏原ふとの二村小

遠りくづ檜原小由有^ハと聞え又郡記小皇后爰定神
田而佃之時引^難離河水欲潤神田と有て住吉神の神田
を耕給ふ地ふり今博多地ある住吉神社の旧地是ふ
り可^ハと云る中ハ如何あ多説と交れと多小其小
其神村より猶上方小至る迄の泊つて在けむ故小私
記め頃ハハ那珂と云る郷小己小成て有^ハと云る猶
小戸と云地名具碓河の傍小残れりと見えたれば正
しく現人大明神を住吉神社の旧地ハ有べきふり
故筑紫日向と以小有^現ハ其現人大明神の社の辺ふり
可くふ思えたり^{神村ハ博多より四五里も上方あり}
^{を以思ふハ古ハ甚ハ大なる泊りて}

こゝ有つりめ和名抄郷名小海部と有つ北面小海を
受たふ内國ふれ其ハ指きて中嶋と云郷ふて古大
ある内ふりし頃の中嶋ふりし後小共小埋れ合て
一の郷とハ成れりふりし後地理の事ハ土人小任
ねて尋ぬへし但用くの地理を云者斯る大古の事
今ハ地回小引合せて説を成すハ世ハ拙き事ふり彼
二神の後ハ大己貴女多名神の造給へれハ大草万
可く又具ハ人代と成てし世ハ浴れり多る在る
可きを其心並く云ハ優
あり故ハ今女ハ云あり
能と刻ハ悪ハ表杼多知婆那と續けて訓べし小門ハ
在る橋と云ハ地名ありしと有ハ如ハ才十一書ハ乃往
見粟門及速吸名門然ハ二門廟既太急故還向於橋之
小門而拂懼也と見えたり其二門の潮の太く急きハ
喜ハ大海ハ在りて大門ふりハ故あり万葉三十一小

留火之明大門ハ云ハ又並びし自明門海嶋所見とハ
見えたりハ大海ふりハ大門と云ハ又打任せてハ唯
小門と耳云事常あり右ハ粟門速吸名門ハ更あり仲
哀天皇八年御紀小自穴門至向津野大瀨為東門以名
籠 龜屋大瀨為西門と有る門是ふり以門ハ大海のふり
故ハ大瀨と云事右ハ所見たりハ如ハ冠辞考ハ右の
ハ筑紫の橋小門をハ平登と云ハ對ハて以て於登と
訓ハさふり小ハ假名ハ字ハ大ハの假名ハ於保ふり
を略して於ハ云耳誓ハバ億計王公(意)福(意)神の意御計
王ハ御弟ありて小神の意ありハ如ハ故ハ大門ハ海門
を云ふと有ハ如ハ但右ハ歌を阿加志能ハ訓ハ故ハ
然ハ説ハ有ハ如ハ阿加志大門と續けて事ハ無ハ所
あり小門ハ河水ハ海ハ落ハ口あり所あり謂ハ水

△御兄少大

○日本書紀傳十

○二百九十一

門を云ふるは其水門神等号速秋津日命と有る其十四
 六小云るが如く古事記御身脩段少成坐る伊豆能賣
 神少御在るは其橘小門小相叶へるを思ふ可し
 神賀詞小須^須伎振遠止美乃水乃弥乎知尔 御表知坐
 又布を後釋小須^須伎振の滌振をて遠止美の伎ふ
 け爪土記ある仁多郡三津(水)の斐川の傍なる御小
 津^津其河水ふり着て滌振と云り神代は阿羅須根
 高日子命御身体浴坐^沐有^沐就て云るめて川のて身
 小在れ物小在れ滌振れ其勢のて流るる水の淀
 て良止方^ハ海^海故の遠止美乃水と云り又ハ美乃

ハ乃美を下上と誤るるめて遠止^ト美^モ水^ミめても有る
 遠止ハ小門めて三津の河門を云ふ橘^門の如
 意^取と有る遠止美^トも遠止^トめても此の小門の例
 あり然るハ遠止美と云時ハ右よとたる如く水の
 淀^淀の山より真下垂りよ落る時こり其勢も激く有
 けは河海の境よ至て外より潮の指入るが為よ水
 の澆^澆事人の知れが如し古事記も此も上
 瀬下瀬と瀬連瀬弱^弱ハ告別給へるを考ふ可し
 橘ハ假字よて立鼻之云事あり立^立ハ物の斜ありず
 削たるが如くして真直よ立るを云る越の立山を
 ど然り又風神祭詞ある龍田乃立野あるも前よ大和
 川有る其高岸よ在る田あり野あり故立田と云い立

向^向の地名ハ其
 神倉三平は好字と
 著け三平と定む可
 由ハ詔有けむも神
 紀ハ其より以前よ奉
 上^上て故よ本ハ任る
 借字と被用者
 あり

野といふ云るあり鼻といふ山の岬あり所を鼻と云りハ
幡鼻山崎鼻を云い又汝^海もも渚崎の所を生田鼻
大和田鼻を云る是あり然れバ波那^行の端字ふど
あどや叶べし^{然れバ山端と云も山鼻と云ひか}
名も某鼻と云が多在るも皆^{如し又因くよて海河は傍たる地}
其渚崎あり出張たる地^{地あり} 渚立鼻といふ云ハ其小
門の傍あり渚崎の平和ハ非で削立たる如くあり
より云名と通えたり 和名抄郡名ハ武藏国橘樹^{太知}
と有る其橘樹は依りありと思ふ^{波奈}然らず其地理を
見ると此郡の海岸ハ一も甚高き一て削立たる如く
あり故に號たりと所見たり 越前と加賀との堺は加

賀^國田は属て立鼻と云地の有る予も通り乍心を着て
見たると然る状の地あり 貝原篤信ハ八幡本記ハ席
田郡ハ立花山有り青木村有り云と云て其を橘之
檣原の證と爲るハ立ざる事ありとも立花山の状を
見ると上の例よて削立たる如き山端有り此例を推
て見ると太古ハ其河あり一那珂郡麓河の水原あり
彼現人大明神の邊ハ削り立ちか如き者^渚崎の有けむ
其を小戸橋といふ云り一者あり次ハ上瀬中瀬下瀬と
有ハ水の流りよ就て宣へる御言ありを以思ふよも
夫ハ此河の小戸橋よて此より餘も求む可き處ハ一

潮
二里許、神代紀の深段、生坐、皇神等、村の産
土社と古より祭来る云々、大戸の少東、十嶋の如く
長石を横に積たる形あり、岩山有り、其を被戸と云て
天神の御潮井有、所と云傳たり、又大戸の沖、中之
瀬と云、所有り、此所、靈處とて、海土たり、又野北浦の沖、三
の貝類を取らず、是、中津瀬の謂、又野北浦の沖、三
里許、伊加美瀬、云有り、是、亦、靈處あり、さて、船人
の大、よ、恐る、所あり、伊の一言を省きて、上瀬と云事
よ、や、有、ひ、延、寶、八年の記、瀬、織、津、姫、を、祀、り、云、事
由、有、て、聞、ゆ、又、沖、之、伊、豆、毛、地、之、伊、豆、毛、と、云、瀬、船、越、浦
の、沖、に、在、り、漁、人、甚、恐、る、所、あり、若、過、て、此、瀬、に、船、を
觸、り、車、有、ま、り、忽、ち、其、祟、有、ま、り、伊、豆、毛、瀬、に、伊、の、一
言、を、省、き、て、下、瀬、多、し、其、三、所、の、瀬、の、陸、地、は、各、其、社
々、有、ま、り、由、有、て、思、ゆ、云、り、右、の、大、戸、又、被、戸、域、に、中、之、
瀬、又、ハ、伊、加、美、瀬、又、沖、之、伊、豆、毛、地、之、伊、豆、毛、と、云、地、名
拾、を、給、集、め、右、の、如、く、云、多、一、直、の、理、有、り、聞、ゆ、と
鼻、と、一、檣、原、を、淡、浪、之、原、と、し、て、其、本、た、る、實、地、古、書、に
合、さ、ま、り、必、其、ま、り、甘、み、難、し、其、上、よ、上、瀬、中、瀬、下、瀬、
ハ、水、の、流、れ、必、其、ま、り、就、を、云、ふ、こ、ろ、有、り、上、瀬、中、瀬、下、瀬、
ハ、水、の、流、れ、必、其、ま、り、就、を、云、ふ、こ、ろ、有、り、上、瀬、中、瀬、下、瀬、

近、け、は、水、勢、の、速、く、可、く、下、瀬、ハ、潮、に、障、り、弱
り、可、き、も、思、ふ、可、し、等、し、く、同、面、あり、大、海、よ、て
然、る、緩、急、の、有、る、可、し、非、者、を、何、然、と、も、芥、屋、の、大
戸、ハ、一、も、靈、窟、あり、有、り、状、あり、何、と、し、て、神、代
の、神、蹟、何、と、云、事、有、り、又、具、原、氏、の、早、良、郡、經、濱、の、山
ろ、と、云、何、と、云、事、有、り、又、具、原、氏、の、早、良、郡、經、濱、の、山
瘡、を、小、戸、山、と、云、此、處、に、地、藏、有、り、瘡、を、瘡、者、木、芽、を
作、て、此、を、奉、じ、其、病、癒、ゆ、と、祈、願、す、者、多、し、神、代
紀、に、謂、ゆ、み、戸、に、此、地、あり、云、事、多、し、餘、り、ハ、世
離、た、ま、り、此、も、亦、如、何、あり、事、あり、然、れ、ハ、今、も、
其、地、を、求、探、し、事、ハ、甚、難、き、事、あり、少、の、地、名、あり、
を、由、縁、め、し、て、此、不、其、と、云、し、事、ハ、甚、に、容、易、き、事、
を、物、を、強、り、と、云、者、あり、唯、上、よ、云、事、ハ、那、珂、郡、仲、村、と、云
説、不、獨、穂、の、時、に、成、坐、る、八、十、在、津、日、神、神、直、日、神、大、直
日、神、三、神、を、し、も、那、珂、郡、福、崎、あり、筑、紫、石、の、辺、に、鎮、坐
る、由、記、せ、る、ハ、社、説、ハ、古、く、傳、へ、た、る、を、取、て、記、さ、し、た
ら、多、し、可、し、若、然、く、ハ、愈、那、珂、郡、在、筑、紫、橘、之、カ、戸、と、も
ハ、上、よ、引、ら、釋、紀、に、在、吉、神、社、を、在、筑、紫、橘、之、カ、戸、と、も
又、ハ、在、筑、紫、橘、之、カ、戸、と、も、云、事、私、説、ハ、古、く、傳、る、事

○日本書紀傳十

○三百九十五

十月三日夜書見年雅
注四字其時地撰以
下十一月三日卷七

著明き者 ○檜原ハ第七二書ニ書ク檜此云阿波岐と有テ
ありりし古事記云阿波岐原と作るも同ト記傳六四十一和名
抄ノ説文云檜梓之屬也日本紀私記云阿波木今按入
檜木一名也見亦雅註云く儲是も地名ハ非也松原
檜原柳原柞原あどの類も唯此木の多く生たる地
を云ある可しと有か如し若て右の日向ハ戸ハ一
海水ノ浮沈ニ為給いて大御身ノ所汚盪滌給い
所ノ一此檜原ハ一也天神ノ甲給いて大御身ノ著
給へりし物を贖給いて祓ノ事を行給へりし所あり
次ノ祓除ノ二字を美曾岐波羅比給布ヒ古く訓来也

るよ心を著べき者あり第七二書にも此を同ト事と
改欲濯除其穢惡乃往見四門及速吸名門然此二門潮
既太急故還向於櫛之小門而拂濯也ハリススヤセシメトと上ハ濯除と
有る其を下ハ拂濯と打返して文を成せらるも身祓
と祓とハ別とあり者ありが故あり此を以て祓と祓
と又其所を異よりて行つて給へりし事をも併せて
曉る可し古事記の此段より到坐坐紫日向之櫛小門
と云はれ但文の續を委し見ざれば其阿波岐原ノ
全體を云時ハ波羅比ハ給へりが如くあるも然らず
在ハ一種ノ所作ありが故ハ唯波羅比ヒと耳有ても聞
ゆ所あり其小門ハ美曾岐ノ事有し地名
を二共云續るが故ハ祓祓をも並擧ぐたり

○日本書紀傳下

○二百九十二

了有けと實よハ櫻登被登表 檜ハ名義抄ノ訓多目
の義を以て記されたるなり 檜ハ名義抄ノ訓多目
ハく阿波岐ノ言義ハ和名抄ノ檜木一名也ト有リ
依て考るニ大葉木ト云事あり然るハ古事記五垣ノ
在甜白檜之前葉廣熊白檜ト見え又朝倉大御歌ノ夜
麻能賀比尔多知那加由流波毗呂久麻加斯トも詠セ
給へりカ如ク檜ハ葉廣なる物も有リトバ大葉木ト
ハ云ありけり又波毗呂を省きて久麻加志賀波表ト
詠セ給へり事後建命ノ御歌ノ所見たり久麻ハ葉ノ
廣クハ物と容るニ隈有ト云称あり又和名抄ノ檜萬
年木也和名加之一名和一名檜ト有り愈阿波岐ト加

斯ト同物あり事灼然ト和同欽刑罰具ト和檜也桔
有ハ手檜ト云事あり檜ト和之加ト有リ足檜ト
共ト檜木を用て造る名あり故ト檜ト一名トも成
蒲檜隈藤ス馬鞭草ありトの久麻ト同トハ何トも葉ノ
廣ク隈有 借阿波岐ハ葉ノ状ト就ト號ト加斯ハ堅固
キ幹ト依りカ名トて 同物トもト異称有リ事云も更
るカ又右ト因て金木トも云けいとさへハ所思ゆ
る然るハ此檜原ト幸行トハ其木ト被具を取懸さて
給ハむ爲トて謂ゆる千座置戸の始トハ有けめ室
鏡開始章ト諸神歸罪過於素戔鳴尊而科之以千座置
戸遂促徵矣ト所見たり其時ハ此ノ故事ト依て右ノ

檣を用て千座置戸ハ被製造たりも物然く大後詞
小天津金木^字本打切末打断^成千座置座^女置足^{波志}
云々この所見たりけり祝詞考ハ彼伊邪那岐命の御
自捨給へり^一須佐之男命を他より責て出させし
も事の意ハ等しけり此二大御神の御事共合せ
て被身降の法として人代小至りて凡行へり^一
云々^一然る事ハ有けり但臨時祭式ハ凡
云し置座木等之類仰五畿内諸国^國神戸百姓令採進之
と見え木^工寮式あり八座置四座置條小以木寫之長
者二尺四寸短者一尺二寸各以八枚爲束名称ハ座置

長短各以四枚爲束名称四座置^一有て何木を以て爲
ろと云事を知らずと云々檣ハ幹より枝小至り迄^一曲
ろ事無く真直かり物^一して固く強き事金の如き木
か^一布けれハ天津金木と^一云て其を以て作られ
たりけり事行ハ疑ハい孝德天皇四年御紀大御歌
小舸娜記都該阿我朽賦古麻播と詠せ給へり舸娜記
ハ和名拙刑罰具小鉗^{和名加奈岐頭}以鐵束^鉗也野王按鉄^鉗和名同上
脰沓也^一有れり其ハ鉗又鉄字をこ^一ハ擧たりけ
れ^一ハ鉄^字の事あり古ハ檣木を被用たり^一金木と
云稱ハ有りけり又扇明天皇六年御紀小兵尽前役

の鐵ふどふ似て堅固なるを以て金木と云ふ
有けり一諸大神の以榎原の幸行て被め場と成し給
へり一事の然る少縁ありゆ所因有る木ありが故
黄泉神の如き鬼^{モノ}類の甚く恐避する事有る可
神を祭るも其木を被用し同く不祥を避る為
と聞えて垂仁天皇二十五年御紀の一云天皇以倭姫
命為御杖貢奉於天照太神是以倭姫命以天照太神鎮
坐於磯城嚴櫃之本而祠之と有る嚴櫃之本を古事記
朝倉大御歌の美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登
宮殿由^レ斯伎加母と詠せ給へり伊都の稜威の契あり

事下り由^レ斯伎と有る知る然れ^レ嚴櫃と^レ神
威の具有り^レ契ありて神武天皇御紀大御歌の伊
智佐^{イサ}未^ミ迺^ノ於^レ明^ミ鷄^ニ向^シ塙^トと^レ給^ハへり^レ稜^レ威^ノ賢
木實之多と言ふ續きなり又神功皇后御紀神名の撞
賢木嚴之御魂云々と申せる嚴の稜威の賢木を撞
給へり状の嚴の^レ由^レ係^レり^レ御名あり右の二を
以思ふも古の賢木と云へり榎あり一事自然知ら
る然るも以木を葉廣熊白禱とい云けり如く枝葉共
小甚く扶^レ疏^レして栄ひ^レ木あり^レ然すが^レ神威を^レ具^レ
へ清^レり^レ故^レ伊智佐^{イサ}未^ミ迺^ノ於^レ明^ミ鷄^ニ向^シ塙^トと云ひ又撞賢木嚴之御

魂とい申し續けたる小形有けり又其撞字ハ彼文
選以建撞鐘と有と曰小き小心を著べきあり諸以
檣原の鏡の至て如以く長くしく成れるハ牽強附會
の如く思ふくむ人も有ふめくは以ハ常小云ふ松原
檣原の例小てハ漸く事おて其因て起れり所有り
又受て被小祭小右の木を用て事を成し来れり
古の遺式を示さむとての事なり下神の傳小其亦名
撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命の御事を明く申す
可く又宝鏡開始章天香之真坂樹の傳小註せ事
共を合せ荒て曉す可し○被除焉ハ曰小依て美曾岐波羅比給比
伎と訓べ古事記小被也と有るハ傳小然訓附す

此第十一書小欲濯スミヤカシム除具穢惡乃云ハ而ハ拏濯也ハ有る
曰小事あり履神天皇五年御紀小車持君罪有て負二惡
解除善解除而出於長渚崎今被禊見之雄略天皇十
三年御紀小齒田根命罪を犯せり時ハ以馬八匹大刀
八口被除罪過と有り又天武天皇七年御紀小是春將
祠天神祀祇而天下悉被禊之所見たれハ身ハ除と解
除と必ニ共小相並て被行ハ大古の定格ハ又ハ知る
此たりけり又孝徳天皇二年御紀小被除ハ字ハ出る
以ハ字ハ通證ハ同語曰被除其心故伊弉諾大神先小泉津
平坂ハ被其帶又被其衣又被其禪と有ハ其泉田の

方へ投返し給へるを今以穩原の事行して其大御身
小着させ給へる物を脱棄て其穩の柵シメ取懸させ給
へりけい是即袂柱ハエツタの起りて謂ゆる十座置戸の始又
解除ハラヒと云事の原あり次小便ミツマ中其小門解立給ひて海底
小沈シヅ潮申小潜き潮止シヅ浮びて大御身を濯生し給
ひ是身ミツマ滌シヅ小て如シヅ解除と身滌シヅと同一手續きり
事小有りけれども其行りて給ふ所別あり歟シヅ不シヅ歟
小ハ身滌シヅの事實の委シヅく有て解除の形状を省記
され下ふる宝鏡開始章シヅ素戔嗚尊シヅ解除を負す
事有て身滌シヅの事小至て全小漏されてふい有り

此ハ互シヅ相通シヅハ一シヅて其実の光景を得る事多在る者
がうシヅ祝詞考シヅ袂シヅと古事記シヅ伊邪那岐命シヅ黄泉小
門シヅ大御身シヅ着坐り物と悉脱棄給ふと云不シヅ織
給ふシヅ身滌シヅと云ふ身シヅ次シヅ海潮シヅ浸シヅて大御身を滌
ふシヅ叙シヅの本ありけり但古事記シヅ袂段シヅ故於シヅ投棄御
杖シヅ所成シヅ神名シヅ右シヅ件シヅ自シヅ船戸シヅ神シヅ以下邊津シヅ甲斐シヅ辨
羅神シヅ以前シヅ十二シヅ神者シヅ因シヅ脱シヅ着シヅ身シヅ之物シヅ所生シヅ神也シヅと云迄シヅの
事実シヅハ一シヅ以シヅ泉門シヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
混シヅれシヅハ一シヅ入シヅたるシヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
不シヅ具シヅハ一シヅ入シヅたるシヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
右シヅの傳シヅハ一シヅ入シヅたるシヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
脱棄シヅて袂柱シヅと成シヅ給シヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
賜物シヅハ一シヅ入シヅたるシヅハ一シヅ書シヅの趣シヅあり正シヅしりけ
其ハ宝鏡シヅ開始章シヅ然後シヅ諸神シヅ罪過シヅ於素
戔嗚尊シヅ而科シヅ以十座置戸シヅ云シヅ其第二シヅ一書シヅ小己シヅ而科

罪於素戔鳴弁而責其後具云々用以解除竟遂以神逐
之理逐之其第三一書小即科素戔鳴弁子座置戸之解
除云々以三共小解除の事身有て身滌の事とてハ
所見さる故小誰ハ然ハ心ハ看さりげふれどハ
万第三四三六下十小天有佐羅能小野之七相管乎取持而久
堅乃天川原尔出立而潔身而麻之乎之詠ハ其素戔
鳴弁の古語を取用たる者ハ以ハ潔身の事身
を云々如ふれどハ然ハ左佐羅能小野之云ハ其解
除を責せて神逐小逐ハたりハ天止の地名ハ其神
ハ八束髪速佐須良命と申す御名有る如く流瀨リヌラフの字
離

の義あり七相管乎取持而ハ其第三一書小使天兒屋
命掌其解除之太諄辭辞而宣之之有る其作法ハ大被
詞小天津管曾乎本詞新末詞切氏八針ハ取辟氏天津
祝詞乃太祝詞事乎宣礼と記され神樂歌小奈加止美
乃古須氣乎佐紀波良比伊能利志古登波ふと有る是
あり次小久堅乃天川原尔出立而潔身而麻之乎と有
ハ御誓約の事有ハ天安河ハ以て御身潔ハ有つハ傳
ハ遺れるあり以ハて解除と身滌と二を業行ハれハ
事著明きを記記共小傳漏されハ状ふれどハ解除と
云ハ其を統たる名ハハ身滌ハ其中小在る事あり

をこ了云ハ波羅比 出雲風土記仁多郡三津郷條小大
 と通ふ美ハ非ナ 神大穴持命御子何遲須栢高日子命御須髮八握握于生
 晝夜哭坐而辞不通云ハ大神夢願給告御子之哭由夢
 尔願坐則夜夢見坐之御子之辞通則寤同給尔時御津
 申尔時何處也云同給即御祖前タケウツリマシ交本於坐命石川度坂
 上至雷申是処也尔時其津水沼於而御身沐浴坐故国
 造神吉事奏参向朝廷時具水沼出而用初也と見え凡
 御身沐浴沐浴美曾岐と訓リ外無き所あり神賀
 詞須須之伎振衰止美乃水乃弥予知尔御衰知坐と有
 右の故事ハ本著たる事合ヤ續讀て曉可可ト又以毛

古事記ハ漢字を
 然訓と又名美掛の訓
 然ナリ

以て美曾岐と須須久と同トき事を明可可くふむ
 右の須須伎振ハ古事記御宇気比段ハ振除と有ハ同
 トきを以ハハ濯字を布理須久其ハ訓リせて振
 除と云ハ濯振と以ハハ右の如く被字を美曾岐ハ被
 云ハ一幸ナリ 以ハハ右の如く被字を美曾岐ハ被
 用ルハ万葉三六四十ハ潔身而麻之乎四三十ハ潔身為尔
 去六十九ハ潔而益乎十一六ハ玉久世清河原身被
 為不有有リ 祝詞考頭書ハ美曾岐ハ身除不事古事
 記ハ吾者為御身之禊と有ハ知バハ然
 るを後ハ記ハ東河西河ハ御禊ハ書ヲ見テ美を
 御の意ハ思ハハ非事あり御禊ハ書クハ天皇の御事
 御ハ故ハ御ハ云ハハ有レ又其を禊ハ書クハ漢
 籍状ハ略あり大御身除と云バキ事あり出雲凡土記
 御身沐浴と有リ 故上ハ引可如く出雲風土記ハ御
 思ハハ可有有リ 故上ハ引可如く出雲風土記ハ御
 身沐浴と有を美曾岐と訓リ其同字を崇神天皇七

年御記小天皇乃沐浴齋戒際淨殿内而祈之曰云々
見え又其沐浴と際淨とを合せて四十八年御記小名
皇夢^夢朕以^夢夢占之^夢二皇子^夢於是^夢被^夢命^夢淨^夢沐^夢而^夢祈^夢寐^夢各^夢得^夢夢
也^夢淨^夢沐^夢の^夢二^夢字^夢を^夢以^夢て^夢又^夢允^夢恭^夢天^夢皇^夢四^夢年^夢御^夢記^夢小^夢故^夢諸^夢氏^夢
姓^夢人^夢等^夢亦^夢浴^夢齋^夢戒^夢若^夢為^夢盟^夢神^夢探^夢湯^夢と^夢有^夢る^夢沐^夢浴^夢を^夢以^夢て^夢共^夢小^夢
由^夢加^夢波^夢阿^夢美^夢と^夢到^夢る^夢眉^夢川^夢浴^夢と^夢云^夢事^夢亦^夢謂^夢曰^夢る^夢許^夢理^夢
の^夢事^夢少^夢し^夢共^夢小^夢身^夢滌^夢ふ^夢事^夢云^夢も^夢更^夢亦^夢眉^夢川^夢と^夢小^夢宝^夢劍^夢
出^夢現^夢章^夢茅^夢一^夢昏^夢亦^夢神^夢名^夢小^夢清^夢之^夢湯^夢山^夢主^夢云^夢と^夢有^夢る^夢小^夢
齋^夢山^夢の^夢美^夢又^夢皇^夢太^夢神^夢宮^夢後^夢式^夢帳^夢小^夢御^夢田^夢を^夢湯^夢田^夢と^夢有^夢る^夢小^夢
田^夢亦^夢亦^夢同^夢ト^夢小^夢沐^夢浴^夢の^夢清^夢も^夢河^夢水^夢小^夢身^夢を^夢滌^夢ぐ^夢と^夢云^夢不^夢

カ^カ田^カト^カ川^カ小^カ浴^カと^カ小^カ身^カ滌^カめ^カ時^カふ^カぬ^カと^カ然^カ云^カす^カ其^カ
カ^カ崇^カ神^カ天^カ皇^カ六^カ十^カ年^カ御^カ記^カ小^カ淵^カ水^カ清^カ冷^カ履^カ欲^カ共^カ沐^カ浴^カ云^カ
カ^カ良^カ布^カと^カ阿^カ牟^カと^カ有^カる^カ以^カ知^カべ^カ一^カ名^カ美^カ抄^カ小^カ沐^カを^カ加^カ志^カ良^カ阿^カ
カ^カ加^カ波^カ阿^カ牟^カと^カ阿^カ良^カ布^カと^カ美^カ阿^カ良^カ布^カと^カ小^カ到^カる^カ由^カ阿^カ牟^カと^カ小^カ
カ^カ共^カ小^カ身^カ滌^カめ^カ亦^カ有^カる^カ偕^カ其^カ沐^カ浴^カ字^カ論^カ諸^カ小^カ出^カづ^カ又^カ記^カ傳^カ
カ^カ小^カ今^カ小^カ除^カ服^カ亦^カ小^カ海^カ川^カ辺^カ出^カる^カ清^カ亦^カ亦^カ又^カ許^カ理^カと^カ
カ^カ水^カ浴^カる^カ事^カ為^カる^カ皆^カ禊^カの^カ意^カ味^カ不^カり^カ許^カ理^カハ^カ川^カ降^カめ^カ約^カ
カ^カり^カた^カる^カ亦^カ亦^カと^カ云^カれた^カる^カ然^カ言^カふ^カ其^カ許^カ理^カ不^カり^カ身^カ
カ^カ滌^カふ^カり^カけれ^カ小^カ解^カ除^カと^カ共^カ小^カ行^カい^カむ^カ古^カ意^カカ^カ有^カる^カバ^カ
カ^カカ^カけ^カる^カ通^カ證^カ小^カ魏^カ志^カ倭^カ人^カ傳^カ曰^カ人^カ死^カ己^カ葬^カ則^カ拳^カ家^カ入^カ水^カ滌^カ
カ^カ祥^カと^カ有^カる^カ如^カ練^カ沐^カ晋^カ書^カ亦^カ曰^カ拳^カ家^カ入^カ水^カ滌^カ浴^カ身^カ滌^カ以^カ除^カ不^カ
カ^カ習^カ俗^カを^カ被^カ固^カめて^カ記^カせ^カる^カ亦^カ亦^カ○^カ波^カ羅^カ比^カの^カ美^カ曾^カ岐^カ
カ^カを^カ以^カて^カ重^カた^カる^カ摠^カ名^カ亦^カ亦^カ事^カ右^カ小^カ粗^カ云^カ不^カか^カ如^カ一^カ記^カ傳^カ六^カ
カ^カ十^カ四^カ

日本書紀傳十

〇三百六

四小美曾岐ハ必水辺不出て為ハ限リ波羅比ハ水辺
かて為を怨ルねをハ廣ク云稱ふハ故朱雀門前の大
被又人ハ負する被ふとを美曾岐ハ云ズ水辺の袂
をハ波良比と云ハ常ふリと有ハ如クハて美曾岐
ハ身を滌ぐ事ふる故ハ以ハ當ハ滌去吾身之濁穢とハ
又遂邊^汚滌身之行^汚とハ有テ他^汚より来リテ身ハ着る
穢惡を滌去ス一途ハ係リテ狭きを波良比ハハハ他
より来れりハ自より出る^該ハ該^{オレカシ}羅めて其を罪と云テ
散^{ハテラ}在リハ去るを云レハ美曾岐ハ穢ハ就き波良比ハ
罪ハ就テ行ふ事ふリ其ハ大夜詔ハ田^國中ハ成出^{武天}

之益人等^我過犯^{家難}罪事^波天津罪^止云ハ田津罪
止云ハ許ハ太久^不罪出^武云ハ如ハ所^聞食^氏皇御孫
之命^乃朝廷^半始^氏天下四方^回波^罪止云^布罪^波不在
止云^遺罪^波不在^止被^給比^清給^事云^ハ止^{なり}
次ハ小罪と云事を幾許ハ重ハ作云下^一テ其終ハ被
給^比清^給と云事の二有を以テ^被罪^ハ對^ふ事^ハを曉
カフ可^一借^右の天津罪ハ衣食住を妨るを以テ罪と
為る事予始て見定たり説有テ其ハ宝鏡問始章ハ註
セテ^ケ如ク又田津罪ハ條ハ後釋ハ生膚折死膚折
白人胡久美ハ穢を以罪と為るふリ己母犯罪己子犯

罪母典子犯罪子典母犯罪畜犯罪の五條ハ好ふり昆
虫乃天高津神乃天高津鳥乃天の三條ハ災災小過小を
以て罪と為らふり畜休忌盡物為罪の二條ハ惡行不り
次第を被ふたるカ如く穢をハ好をハ天をハ惡行を
小廣く罪と云事不るカ其都美と云語ハハ物を重
ぬる事を積ムと云ハ又憚憚りて毀ハハ為ハ事を包ムと
云類の語ハ波羅比ハ物を散ハ在ハるハ聚ムと
散ハこの意相貫ハ先心を著ハハふハ有ハけるハ瑞珠盟
寶散ハ云ハ俱ハ徹ハ還ハ還ハ前ハ須ハ注ハ一ハ万葉二十條私拙懷
歌ハ安麻ハ乎ハ夫ハ祓ハ波ハ浪ハハ亦ハ宇ハ伎ハ氏ハのハ波ハ良ハハ亦ハ散ハ在
のハ後ハありハ又ハ物のハ分ハ散ハふハるハをハ波ハ良ハ理ハとハ云ハハ雨ハのハ降ハハ
班ハいハとハ云ハハ底ハのハ下ハるハをハ潜ハ然ハとハ云ハハ共ハ小ハ物ハのハ分ハハ散ハ

多ハ美ハふハるハをハ合ハせてハ波ハ良ハ其ハ罪ハとハ祓ハとハ對ハとハ剝ハハ宝鏡
比ハのハ意ハをハ七ハ察ハとハひハ可ハハ其ハ罪ハとハ祓ハとハ對ハとハ剝ハハ宝鏡
開始章第二一書ハ科罪於素戔鳴神而責其祓具と見
え古語拾遺ハ同段ハ歸罪過於素戔鳴神科之以ハ干座
置戸云ハ仍解除其罪遂降焉と有ハ又其權原宮段ハ
令天種子命解除天罪國罪事と記ハ以崇神天皇十二
年序紀ハ今解罪改過敦礼神祇と見え神功皇后御紀
ハ以為知所崇之神欲求財國是以命群臣及百寮以解
罪改過更造耐宮於小山田邑と有ハ其ハとハ古事記ハ
ハ更取國之大奴佐而種ハ求生剝逆剝阿耨溝埋屎戸
上通婚下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類為國之大祓

祝詞乃太祝詞事子宣礼と有る其も亦太祝詞始れ
る事類聚神祇本源の所見乃多か如一如云此今更不
りといふ後の素戔鳴等の解除を原せ奉りれし事ハ
自有乃と位一然為乃との差別てるハ荷けの惣て
の状共相同ト故宝鏡開始章茅三一書素戔鳴等ハ
千座置戸の解除を科す乃使天足屋命掌其解
除之太諄辞而宣之と有る伊弉諾等の如一御自物有
こと給へるハ其其解除之太諄辞一即自宣給ハ可し
を以ハ他一科す乃所多か故ハ天足屋命を一て
使宣給へる一者あり借祝詞ハ神ハ聞え上る者ハて
詞ハ如ク乃良良天津神ハ天磐門ハ押披ハ天之八

重雲子伊頭乃千別ハ千別ハ所聞食武天津神ハ高山
之末短山之末ハ止坐ハ高山之伊德理短山之伊德理
手撥別ハ所聞食武と有る如く其を神の聞食ハ世給
ひて其除こる可し罪穢ハ一ハ被戸神等の請取ハ一
て根田底田ハ流離へ失給ハ由即其詞ハ出たハ然れ
ども伊弉諾大神の太諄辞ハ一ハ高天原ハ神留坐す
皇祖天神ハ一ハ禱申させ給ひけり其を皇祖天神
の聞食ハ一ハ給ひて例の豫預鑄造ハ一ハ給ハ靈威ハ
頼て以ハ於て其罪穢を流離へ失ハ被戸神等ハ成出
給へるハ亦ハ有ける唯ハ後除ハ一ハ給へるハとて然る

貴き神等の生坐べく此非るを太淳辞して天神小願
申させ給へりしに依て然る徵信シムシの事ハ有ける事
るハ有けり備事一事の於てハ神祇本源より外の證
す可き文無し依て先ハ思未無く思ハしうと其
始皇祖天神の詔命を以て天降天りて給ひて國土を修
理固成させ給ひけるハ其詔命の違ひて姪兒冷洲の
如き用ひの出来れハ直ハ天神の命を請ひし太
占を以てハ相物為させ給ふ如く露ハ情進ナカシラの事御在
し坐ぬ大神の坐せハ斯る太切イニハ後除の事ハ限り
て又皇祖天神の御命を仰ぎ請給はざるを云ふ理無

れハ又と大後詞ハ根據き又素戔鳴弁の事實ハ對校
へて然思定た多小あり傳事マコトハ此とあり瓦蓋日向の
して又ハ言攀マシハ小あり有ける傳其太マシ譯と云物ハ
しハ甚ハ奇マシハく妙あり詞ハ一ハ実ハ人智ハ得ハ
思企て及至マシハくハ名文あり其ハ己ハ大後詞諸マシ
ハ記ハたれハハハ攀マシハ摠て後除の事ハ其書ハ就
て見ハハ〇所汚マシハ後多那後母能と訓来マシハ不具也不可
一其ハ上ハ吾面到於不須也ハ目汚穢之處に詔給へ
つハ其泉田の穢の事ふれハるハ備大神の如ク宣へ
るハ以前ハ被用マシハるハ還坐ハ後ハ大御身を滌カセ給
ふ計の事ハ有ける事ハ其際ハ降入たハ穢の除ハ
らざりしハ御快く所思ハ坐さるハ故ハ天度ハ皇

祀天神の御霊を仰ぎて悉く其汚垢を盥滌ぎ清め
せ給ひむとてふり止小吾身之屬穢と有ハ合セ考ム
可シ諸ノ古事記ハ片垢ト有ト可シ意ノ所ニ有ル故ニ
以テ訓ハ古人ノ急ヲ盥ハ身ノ所ニ汚ル止小謂ハ身
と失ハ淋トてスるヲ盥ハ條ノ身ノ所ニ汚ル止小謂ハ身
滌ト云ハ車ノ本ニ有リ然レハ盥ハ條ノ曾ニ久ト訓ハ止小所
ふカ如クふレどハ本ハ須ク久ト訓ハ来レり名受
止小盥ハ滌也と有テ曾ニ久ト又ハ於ハ暑久訓ハ條ハ須
久ト又ハ阿良布又曾ニ久ト又ハ波羅布又宇暮久ト有レハ
猶曾久ト訓ハ止小古事記ハ朝倉大御歌ハ美那曾ニ久
際美鉢衰賣又武烈天皇御記歌ハ湍灘曾ニ短思寐

能ハ和根吾ふど有リ又ハ万葉五三止小鹹鹽遠灌知布何
具等久七止小足何久激沾和流鴨止小有テ曾ニ久
ハ進ハ久ハ水を動リ止其ハ浸ヲ云ハ名義
盥ハ於ハ暑久條を宇暮久ト有レ止思合可シ口訣止
盥ハ滌動洗也と有リ又ハ通證止浸ハ久灑也東都賦滌
盥ハ滌動洗也と有リ又ハ通證止浸ハ久灑也東都賦滌
盥ハ滌動洗也と有リ又ハ通證止浸ハ久灑也東都賦滌
字ハ久ト訓ハ曾ニ久ト須ク久トハ女異不
るカ如ク聞中めれ止院條濯盥浴洒ふどの字を曾
久ト須ク久ト訓ハ同言ふリ須受呂止曾ニ叙呂
止通ハ止云ハ如シ倭比賣命の御裳長くテ穢レ止
を洗給ハ止因テ御裳濯川と号け止を思へハ須曾

公天と地との如き
 下を云ハ宇内斯多
 と訓て経テ水上下
 下を云ハ智美斯也
 と訓ハ一是澤也
 猪加美、頭面あり
 斯をハ鹿面あり下
 下を云ハ同斯多り
 備考合テ可
 傳

ず所思才を其中瀬ハル疾リクズ弱クブ其直
 き程を得^得て有リクバ其処小降立てこると思ハレ成
 ぬ々任小興言一給へる小ふむ有ける 右小引る瑞珠
 正哉吾勝と興言一給ハ宝^出現幸ふるハ吾心清ハ
 之と興言一給へるふと何く何ハ心小一感
 言ハ云揚々を云ふリ ○上瀬下瀬公記傳六五下小橋
 小門ハ川の落口ある可けれバ其処ハ瀬スル其遠
 飛鳥宮歌ハ賀美都勢尔伊久比袁宇知斯毛都勢尔
 麻久比袁宇知と有る其小依テ訓ハ一又万葉一十九
 小上瀬尔鷄川午立下瀬尔小網^網刺^渡二三十小上瀬尔
 生玉藻者下瀬尔流^流觸^觸短又二三十上瀬石橋渡下瀬打橋

合国各ハ上總^{加三豆}
 下總^{加三豆}上野^{加三豆}
 乃下野^{加三豆}

渡ふど有り借地理ハ水流小就テ定ハる者あるガ其
 小ハ必賀美斯毛と云ハ定格あり和名抄^{和名抄}名小大和
 国^國添上^{曾布乃}添下^{曾不乃}葛上^{加豆良岐}葛下^{加豆良}
 毛城上^{加美}城下^{之岐乃}郷名小大和国宇智郡^{賀美}
 那珂資母と有^心を考ふる小国名不ハ京の方を本
 として上下と定ハる事ふれども郡名郷名ハ更あり
 村里ハ名小至る迄ハ地ノ高低と水流小依る事ふ
 ガ宇内志多と云ハ事ふリ 頭^頭国と泉^泉国とハ如ク地
 宇内志多と云テ賀美斯毛と云テ鎮火^{鎮火}奈詞^{奈詞}小上津
 国^国下津^{下津}国^国ハ名有を以知^知ハ海宮^{海宮}ナリ 頭^頭国^国を上^上国^国
 云ハ井^井の傍^傍ふる地^地を井^井と^と三^三ふ^ふ瀬^瀬ハ海^海小^小川^川
 ハ賀美斯毛と云ハ中^中小^小所^所あり

かし水の浅き所を云ふ万葉三十一夢乃和太湍者不
 成而湍有毛六二十四小神名火乃湍者浅而瀬二香成良
 武ふど詠をを以知べし又集中瀬音の清けき由を詠
 つか多き水の浅たる所ふる故小浪ふぐる殊小騒
 かしひか故ふり和名抄小瀬水流於破止也世と有り
 漢書注小疾流曰瀬とも見ゆ又同抄小湍和名世急瀬
 也と有り其ハ次ふる太疾の下小云べし名義抄小
 瀬を唯世伊多久と云ふ同トク○太を波那波陀と訓る允伊多久と云ふ同トク小当れる訓ふり
 と耳有り
 其ハ名義抄小太字を波那波陀斯イタクも伊登とイタク訓る
 を万葉七三十一小大莫逝十一十六小極太イタクと有り波
 那波陀も伊多久も同ト訓ふる諾ふり甚字ふど

△海田の虫崎を皇
と云ふと見ふ

右の二訓有ハ同ト偕言美ハ端極イタクあり可ト遊仙
 窟イタク非常と有ハ如ク尋常イタクの度を越テ具端イタクの極ハ迄
 かし至り尽す美ふり又伊登ハ至止イタクの美伊多久ハ至イタク尽
 の意あり小思合す可ト万葉七三十一小甚多毛イタク不零雨
 故十六十一甚多毛不零雪故言多毛又六十一甚毛夜深勿
 行イタクふど以等何れをハ大イタクルモ小換て小聞ゆを以て
 太字を甚と同トく訓べきを曉る可ト物イタクの始と行止
 云り△又万葉九小將極を波氏年と訓るふと其意を合
 せし然ハ説ふあり十三小太字を波陀と訓るハ然る
 略訓イタクハ有 ○疾第十イタク一書小瀬既太急イタクと有りハ波夜
 斯と訓て雅魚イタクと雖も古事記ハ上瀬者瀬速下瀬者

瀬弱と記されたる意と云ひ詞と云ひ如何なる美に
 ければ其の依はく了所思たる名受抄小治字小勢婆
 夜斯と云訓有れば疾をい瀬速と何れく訓べざる
 大夜洞の高山末短山之末典佐久那太理亦落多支都
 速川能瀬坐須瀬織津比咩止云神大海原亦持出幸と
 有る如く水の山より落て川に入る所の瀬ハ殊小太
 急き者亦し有れば其止瀬ハ瀬速とす必云べき
 理のあり有ける記傳ハ瀬速とハ流の急きを云ふり
九りしと云れたるハ然諸瀬速と云語例ハ万葉七丁小
言あがく荷足さす流水尾之岸平早又丁八檜隈川之瀬平早又丁七瀬速見

吾馬凡衝十三丁ハ天漢瀬平早鴨又丁十瀬呼速見落
 当知足白浪亦十一丁ハ八名打度瀬速(見)ふと有る
 是なり又十三丁ハ落洲速濤オナタツハヤヒワラフ十一丁ハ千早人宇治
 度速瀬又三十丁泊(瀬)海川速見早岸平又三十丁急瀬亦立
 不得悉也十三丁ハ速瀬平刺渡十九丁ハ平瀬亦波
 左匠刺渡早岸平波水鳥乎濤都追とし有て速を止ふ
 七下小ハ用ひたり右加落洲速瀬ハ云れハ大神の上瀬
 小ハ身條かせ給ひびウーふりけり和名抄ハ岸と
ハ岸の上瀬下瀬ハ太疾太弱と云ハ合ウ岸を俗ハ波
 夜勢と訓未れを效選注ハ石瀬瀬也水激石間則怒
 成岸と有弱ハ古事記ハ瀬弱と有ハ訓を取ハ事止

○日本書紀傳十

○三百十六

△本小由流斯と訓た
る成種上より疾ハ
急の義よりハ緩
云事允小理小協
一ハ小名義抄也
弱と與和斯と耳
有ルハ恐らくハ由
流斯ハ後の訓あり
ひ

小云るハ如し記傳六五十ハ瀨弱とハ流の緩あるを
云ふり云て弱きを取給ふハ餘り流の緩ある処ハ
際よりぬ故ふる可しと所見たり猶流末ハ成て水の
委めらる処ハ小水勢無を以て弱とハ宣へるやて謂
ゆるは是より流をハ激をハ共杼と訓え委字を共杼
年と云ハ共杼ハ弱門ヨワトの略ゆて其形状ふるをハ共杼
年とハ云ふりけり故ハ瀨の瀨速ハ湍字下瀨の瀨弱
ハ湍字の受ハ当れりといふなり和名抄ハ激訓共止
美俗用湍字云共
止所謂湍度也加湍而湍也と見え湍ハ尔雅注ハ流之所聚也と有り 儲其湍を乃葉小
ハ不通とハ止息とハ不行とハ義訓せり二十五ハ芳

野河遊瀨半早見須臾も不通事魚云と早瀨ハ對云
ふ彼ハ不通の字を用へり三四三十ハ夏葛之不绝使乃
不通有者云とを今本加共波祿婆と訓たれどハ其ハハ
有字行れり故共杼米礼婆と訓べきあり十二十七ハ小
湊入之葦別小船障多今赤吾子不通跡念莫と有ハ正
しく共杼年と訓べき上下ハ流あるを今本ハ許受と
訓るハ強たるあり又三十ハ人言之繁繁ハ因而不通比
日可聞四三十ハ人事乃整ハ因而止息比者鴨と有る
其不通ハ上の例ハ訓べくハ止息ハ共ハ共杼年と訓
つ可し又七三十ハ明日香川七瀨之不行尔と有り其

△小須、伎振遠、
乃水乃弥、知、
表知坐、有、

等の字共を以て瀨弱と云状を、知不可、
門、事愈著、神賀詞、後釋、今、伊勢、人、
の、波、ひ、る、事、の、盛、る、が、馳、い、静、あ、る、を、
と、亦、其、多、相、近、弱、上、引、る、大、夜、詞、の、
出、往、波、荒、藍、之、鹽、乃、八、百、道、乃、八、
座、速、間、都、比、咩、云、神、持、可、吞、
一、書、水、門、神、等、号、速、秋、津、日、命、之、
以、彼、御、祓、段、成、坐、伊、豆、能、賣、神、
津、日、神、水、戸、神、を、以、
乃、是、く、処、違、いた、れ、と、是、小、深、き、由、有、
八、百、會、の、以、豎、同、海、止、の、場、
根、同、の、方、へ、潮、の、波

往、く、門、口、を、北、は、是、又、彼、方、の、水、戸、
川、より、海、へ、水、め、入、り、口、鹽、乃、八、
根、國、の、下、へ、水、の、出、る、口、を、北、は、
所、と、彼、方、へ、出、る、所、と、の、差、を、
ある、古、傳、の、趣、の、妙、ある、事、如、
北、は、其、の、其、奇、珍、ある、説、ある、
立、て、濯、給、へ、う、と、瀨、織、津、比、咩、
速、間、都、比、咩、神、下、瀨、成、給、
文、の、明、く、あり、且、水、門、の、川、
故、潮、の、障、り、復、う、委、事、常、
を、以、て、古、事

△其の就て猶云々
欲さ幸有て傳十
三卷九十四丁速吸
名門の所云々

記小下瀬者瀬弱と記す此又其の下瀬是太弱とハ
載られたるかふむ有るなりけり然れハ瀬織津比呼
神の大海原ル持出武奈と云ハ川より海に出る迄の大
段を云て速閑都比呼神の持可ク吞武氏と云ハ水門よ
り海に出一海より根國に出一却る大段を云ふ此ハ
一所小匠の晴ハ其活用を失ふ可けれハ右カ後釋の
説の如く固く心得べき者あり斯れハ塩乃八百道ハ
脈の八百道有り鹽乃八百會ハ其八百道より出る水
乃水の打合て一ハ海に入る水門の状ハ相合せ心
得へき事云△中瀬ハ瀬速うづ瀬弱うづ有て降
潜き懼がせ給ふ便亘り有けれハ其処と定物為さ

せ給へり一あり右の註せり如く其中瀬ハ於て濯給
ふと虽ハ神の成坐る処ハ各ハ別異ありと所思り
て瀬織津比呼神の成出給へりハ其瀬速閑都比呼神
の成出給へりハ下瀬ハ其申瀬ハ其氣吹戸主
神の成給ハつり其ハ大袂詞ハ其可ク吞氏波氣吹
戸坐強氣吹戸主云神根田底之田ル氣吹放氏有
を茅十一昏ハ入水云ハ出水吹生大直日神云ハ吹生
大地海原之諸神矣と有て其吹生ハ何れハ神ハ係
れり語ハ有れども氣吹戸主大直日一神ハ坐せば
右の如く其概を被ふ氣吹給へり内ハ他神ハ成坐るころ有れ

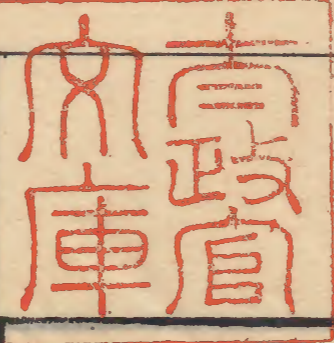
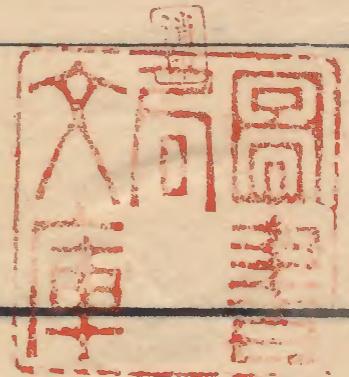
吹生云事至と大直日神の係れる事其亦名を気吹
 戸主と負坐るが就て更の誇無き者あり何を以て其
 神の中瀬も成坐りと云ふる右の瀬織津比咩神
 の天照太神の荒魂在津日神も坐せの御志の進給ふ
 所より上瀬も成坐り速閑都比咩神の水門神も
 坐せ下瀬も成坐へるを其中瀬の疾うは弱
 うらず其ヨロシキ中正を得たる所より有れ此の大直日神の
 其処小就て現出さし給ふ可き事あり凡て物
 中間を中と云ふ本以中瀬より出たる言ひて清明と
 云事ふらひ其故に今禊為給ひて清明く成給ふ瀬ふ
 れはふらひと云れたれど中へ天の御中主神の大御
 名の負して天地の未生らざりける時より有る言ふ

此小就て説有下
 中男命の傳
 小

れバヤ口訣小神道貴中以爲要と云る其意味無小非
 何有む武罪出如味出波天津宮事以
 ず大被詞小許太久乃罪出武如味出波天津宮事以
 大中臣天津金木字本打切末打断字千座置屋字置
 足波志天津管曾字木苅断末苅切字八針字取辟字云
 こと所見たる大中臣ハ本系帳小高天原初而皇神之
 御中皇御孫之御中執持伊賀志梓不頌本系中良布留
 人稱之中臣と有る如き職名をり次小本末を云ハ大
 殿祭詞小今奥山乃大峽小峽字立留木字云々本末字
 山神字祭字中間字持出末字と有るか如く天津金木天
 津管曾共小其本末を截断して中間を用らハ此の中瀬

を以て禊場之為給ひし故実小因られたる事云も更
あり然其中を高ひ給へらハ顯宗天皇二年御紀小天
皇誥之曰石上振之神禊伐本截末於市邊宮治天下云
く之有を其を記古事小ハ五十隱山三尾之竹兵本訶岐苅
末押靡魚笥如調ハ絃琴所治賜天下云く之有て御紀
の方ハ本を伐り末截ふと云て天下を治給ふを中正小取
成りて宣ひ記も同ト事ありガハ絃琴の名を設けて
調ふり云事を中正小取成し給へり御言ひて此の
例小ハ万葉二一丁人麻呂歌小天地日月與滿將行神
乃御面跡次來中と続けたる滿將行小調も中云ふ

言小屬たる熟語あり仲哀天皇の大御名を足仲彦天
皇と稱し奉れり右の滿足へ
る由を以て負せ給へりあり古人の歌詞と雖も正し
き先蹤を踐て麓忽ふりガウ一事故小合せて曉り可
き者 偕其中云語ハ一も受張て甚廣く亘り言あり
由已小天御中主尊の傳小就て往り註らガ如く彼御
名の中ハ一も此世の限を中云るふり矣小傍小物
無ガ如く廣一とし大ありとも譬一へ無き由ふりガ
常小中云も其中を主こして経小上下と云も緯小
左右云も或ハ羽の如く或ハ翼の如し所以小上下
と云ひ左右云ひ表底云ひ本末本云ひ頭尾云
ひ前後云ひ始終云ひ口奥云ふら其事ハ一も



△が故小神ヲ大真日
神の如く直く平き
大神の其所成坐

皆各別異ありて其差有りと雖も中の語耳ハ何れも
 ても替り事無^無を以て中を主と為り事を知べし借上
 下と云ても左右と云ても各何れも偏れりを其中
 ハし正位の處ハ在を以考る小右等小序づる中ハ
 平^{ナラカ}處あり事と所思たり彼上瀬是太疾下瀬是太弱と
 興言し給ひて中瀬小濯ガセ給ふも其平和あり所を
 取給へどもあり今も物^物平^平準^準と^と那羅須と云り万
 可し借次小も所見えたる水ハ^水浮沈と云ハ上下小
 同^同語類ふりガ其中小當りハ流と云語あり其を
 平^平離^離と心得て能通ゆるなり猶中小名處と云本義
 有て奇び小妙ふり意有れども其ハ天御中主尊の傳
 小云○濯ハ記傳六^五下^下小滌ハ曾々岐歸と訓べし是

